

2023年5月14日 佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書2章1～12節

説教題：選びの恵み

今日は「母の日」です。村上宣道という先生は、牧師家庭に生まれながら、中学生の時、「神なんかいない」と神を否定するようになったそうです。「神はいない」と考えると自由になった気がしました。しかし、そこからどんどん落ちて行ったのです。万引きをしてスリルを味わっても、結局生きる意味も目的も、価値も見いだせず、虚無的になり、やがては虚しさの果てに死に場所を探して歩くようにまでなります。「世界中の誰もが赦されても、自分は赦されない」とまで考えたのです。そんな時、一晩中ほつき歩いて明け方に家に帰って来たら、お母さんが待っていました。お母さんは彼を叱るのではなく、ギュッと抱きかかえて「寒かっただろう、お母さんの愛が足りなかった、ごめんねー」と言ったのです。そして祈ってくれました。「神様、イエス様が『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです』と祈られた祈りは、宣道のためでもあったことを信じます」。村上先生は、この祈りから変わるのです。「こんなどうしようもない者は赦されない」と思っていた、しかしその神様が「こんな者を愛して下さる」と信じる事が出来るようになったのです。

母の愛、ありがたいものだと思います。お母様のご健在の方も、既に召されておられる方も、母を思い、母に感謝を捧げる時を持ちたいと願うことです。また今「お母さん」をなさっておられる方々の上に主の祝福を、心からお祈り致します。

さて、今朝は「東方の博士達来訪」の記事を通して信仰の学びをします。

1. 「博士達の来訪」の意味

イエス様が生まれてしばらく経った頃、東方から博士達がエルサレムにやって来て「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか…東の方でその方の星を見たので、拝みにまいりました」(2)と言いました。彼らは何者なのでしょう。なぜ「ユダヤ人の王」が生まれたというのに、異邦人の彼らが拝みに来たのでしょうか。「東の方」というのは「ユダヤから見て東の方」ということで、かつてバビロンやペルシャがあった地域です。「新共同訳」は、彼らを「占星術の学者達」と訳しています。その地方は、占星術が発達していた地域です。つまり彼らは、天文学の先生であり、星占いの先生であり、呪い師であり、祭司でもあり…そういう人達だったと思われれます。ある学者は、「はるか昔に没落した王の種族であったのではないか」とも言っています。

さて、「東方」ですが、例えばバビロンは、イエス誕生の600年前、ユダ国の主だった人々が捕囚民として連れて行かれた地です。バビロンでユダヤ人は惨めな捕囚民でしたが、彼らの信仰はバビロンの人々(後のペルシャの人々)にも影響を与えて行ったと思われれます。「旧約『ダニエル書』」に「ダニエル(ユダヤから連れてこられた貴族の青年)の知恵に驚いたバビロンの王様が、ダニエルを『バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官』(ダニエル 2:48)にした」という記事があります。今でいえば文科大臣にしたということです。ダニエルの信仰はバビロンの人々に影響を与えて行ったはずで、聖書が預言する救い主は、ユダヤ人だけではない、世界の人々に救いを与える救い主でした。「そのような救い主がやがて現れる」という希望は、代々の東方の人々の心も捕らえて行ったと思います。そして不思議なことに、イエス様の時代というのは、「ユダヤから世界を支配する者が出る」という機運のようなものが、中東世界に高まっていた時代だったそうです。そういうことも博士達に影響したかも知れません。

この博士達は占いをしていた人です。多くの人が救いを求めて訪ねて来たでしょう。しかし、彼らの占いには、何の救いも、確かな希望もない、ということを知っていたのが、彼らだったのではないのでしょうか。尼僧からキリスト教の伝道師になった方が言っておられます。「仏教が人間が行き着いた最高の哲学であることは分かる。でも求めているものはなかった…神に向かって祈る、神と交わる世界がなかった」。私達は、私達を救ってくれる確かな「存在」が必要なのです。ある本にはこんな話がありました。その先生の教会に1人の女性が訪ねて来て言いました。「取り返しのつかないこ

とをしました」。先生は「取り返しのつかないこと」の内容を聞いて何か助言して上げようと思いました。しかし、女性は立ち去ってしまうのです。先生は言っています。「あの日、彼女は、何者かの前に立ちたかったのです…彼女の深みに共にいる方をなぜ示すことができなかつたのか…どんな人間の絶望よりもさらに深い神の恩寵の光の中に共に立って、なぜ祈れなかつたのか、と思います」。この話も教えます。人には、神と交わる世界が必要なのではないのでしょうか。神に祈る、神に助けを期待する、そういう世界がなければ、真の光は見えないのです。博士達も、人の世の闇を見ながら、そこに光をもたらすことが出来ない自分達を痛感していたのではないのでしょうか。ある神父さんは「なぜ神父になったのか」と聞かれて「本当に人を救うことの出来る本物に繋がり、その本物にひれ伏したかった」と言いました。博士達も、本当に人を、自分達を、救ってくれる、本物—(神)—に繋がることを求めたのではないのでしょうか。しかし、どうすれば本物の神に出会い、繋がる事が出来るのでしょうか。だからこそ、「ユダヤに生まれる」と言われる「救い主」に、「本物」に、望みをかけたのではないのでしょうか。

彼らは、天文学の専門家です。星の動きに異変が起こった時、それが「神が特別なことを告げるしるしだ」ということが分かったのです。「救い主の誕生」と星との関連は「旧約」にも「ヤコブから一つの星が上り…」(民数記 24:17)と預言されています。だから、ついに「救い主」が生まれることを確信して、「救い主」を訪ねて、はるばるユダヤにやって来たのです。

彼らは「王が生まれるなら、首都の王宮だろう」と考えたと思うのです。だからエルサレムに行きます。そして人々に聞いて回ります。それがヘロデの耳に入りました。王の耳に入ったというのですから、博士達は—(普通考えられている)—3人より多かつたのかも知れません。「200人程だった」という説もあります。いずれにしても、ヘロデは「ユダヤ人の王」と聞いて、自分の地位が脅かされることを恐れました。だから博士達に捜し出してもらって、その子を殺すために祭司長や学者達に問うた情報を博士達に与えました。こうして博士達は、教えられた通りベツレヘムに行くのです。

9~10節「すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ」(2:9~10)。ついに星が止まった、ついに救い主に見えるのです。彼らは「この上もなく喜」(10)びました。そして「ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた」(11)のです。「黄金は王への捧げもの、乳香は祭司への捧げもの、没薬は死者への捧げもの」と言われます。それは真の王であり、人と神を執り成す祭司であり、死ぬことによって救いを成し遂げるイエス様の生涯を表す贈り物でした。博士達は、イエス様がそういう救い主であることを、何か理解していたのかも知れません。しかしそれ以上に、ある本には「宝の箱」というのは「彼らにとって大切な星占い師の商売道具が入っていた箱だった」と説明されていました。もしそうなら、それをイエス様に捧げてしまったということは—(彼らは、神が占いや呪いを嫌われることを知っていたはずです。「旧約聖書」に何度も書かれています。しかし、それを捨てられなかつた。でも彼らは)—救い主に見えることができた、その喜びの中で、神の御心にそぐわないものを捨ててしまいました。そして、彼らは神に近づく新しい生き方を始めるのです。それは12節「別の道から自分の国へ帰って行った」(12)の言葉にも暗示されています。

2. 「博士達の来訪」のメッセージ

この物語は私達に何を語るのでしょうか。2つのことを申し上げます。

1) 神の選びの恵み

「マタイ福音書」では、異邦人で、しかも占い師であつた彼らが最初にイエス様に礼拝を捧げるのです。そのことは「神の選びの不思議」を語るのではないのでしょうか。彼らが星の運行に詳しくたこと、救いを求めていたということを示し上げました。しかし、そんな人達は沢山いたでしょう。しかし彼らだけが、神の招きに応じて、立ち上がってやって来たのです。なぜ、彼らはそうしたのか。それは、最終的には神の選びによることだつたと思います。神に選ばれたから応答したのです。

しかし、ではなぜ、神は彼らを選ばれたのでしょうか。聖書にこうあります。「あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです」(1 コリント 1:26～29)。なぜ、彼らを選ばれたのか。それは、彼らが神の民ではない、異邦人であり、しかも占い師だったからだと思うのです。ユダヤ人にとって異邦人は神の救いから漏れるべき人々でした。しかも、申しあげた通り、「占い」は神が嫌われることです。彼らは、神に選ばれるに相応しい人達ではなかった、御前に誇るべきものは何1つ持っていなかった、しかしだからこそ、イエスにお会いした時、そんな自分達に神が目を留めて下さり、今救い主に見える、それを思っ喜びに溢れたのではないのでしょうか。神に心からの感謝を捧げることが出来たのではないのでしょうか。

私達も同じです。お1人びとり、教会にお出でになる切っ掛け、理由は、色々とあられるでしょう。それは自分で決めたことのように思っても、決してそれだけではないのです。最後は神の選びです。あなたは神に選ばれた。だから、神の招きに応答してイエス様の前に出ておられるのです。もし皆さんが「私は選ばれるような者ではない」と思われるなら、だからこそ神は選ばれたのです。大塚久雄という経済学者が講演の中でこう言いました。『自分は無きに等しい者であって、その自分を神は選んで下さった』、そのことを支えにやって来た。「私が神様を選んだのではない。神様が私を選ばれたのだ」という事実は、私達の歩みを支えるのです。ある方が洗礼を受けられた時、牧師が「あなたがキリスト教の神様を選んだのではなく、神様があなたを選ばれたのですよ」と話したら、その姉妹は「自分が選んだのではなくて、神様が自分を選んで下さったのですか。ありがたいことですね。本当にありがたい」、そう言って涙を流されたそうです。私達は、選ばれた恵みを、それが当たり前になってしまって、忘れてしまう時があるのではないのでしょうか。しかし、神に選ばれ、神を「私の主」として持ち、神に礼拝を捧げ、神に希望を持って生きることができると、それは大きな恵みではないのでしょうか。

それは、こうも表現できます。イエスはある時、言われました。「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のために…いつまでも…放っておかれることがあるのでしょうか」(ルカ 18:7)。「選ばれた民の祈りに、神は必ず答えて下さる」という言葉です。「神によって選ばれているという事実があるから、選ばれた者の祈りだから、神は聞いて下さる」、それが私達の祈りの根拠です。そしてある牧師が言いました。「私達がたとえどんな困難な所に立っているにしても、祈ることができる限り、道は必ず前に開けるのです」。選ばれたということは、それを根拠に、どんなに困難なところに立たされても、祈りつつ、神様に期待しつつ歩むことが出来るということでもあります。本当に感謝なことだと思います。

いずれにしても、この個所は、選びの恵みを語ります。選ばれたという事実に感謝し、その恵みの事実を大切にしていきたい。

2) 神の招きに対する応答の祝福

「博士達は、神から遠いところにいた、しかしだからこそ、神に招かれたことを感謝して 2000km の距離をやって来た」と申しあげました。彼らは、神の招きに応答したのです。そしてその応答に応じて、神様は彼らを見事にイエス様の御許に導かれました。一方「キリストが生まれるのはベツレヘムです」と答えることが出来た祭司長達、学者達は、神の招きに応えない。だからイエス様に見えるという祝福に与れないのです。その意味でこの個所は、神の招きに応答することの大切さ、その祝福を語るのではないのでしょうか。神を経験する方法、それは、恐らく神の招きに応答することです。そしてそれは、信仰を持つ時のことだけでなく、信仰の生涯において、私達を前へ押し出してくれる祝福の方法ではないのでしょうか。

このメッセージを準備する中で「アマールと夜の訪問者」という話を知りました。アメリカで生ま

れたオペラのようなのですが…。舞台はイエス様が生まれた時代のベツレヘムです。足の悪い少年アマールは、母親と2人で貧しい暮らしをしていました。ある夜、アマールは母親に言います。「家の窓と同じくらい大きな星が出ているよ」。その夜遅く、ドアをノックする音が聞こえます。アマールがドアを開けると、そこには立派な身なりの3人の王様と従者達がいました。王様達は言いました。「素晴らしい子どもに貢ぎ物を捧げるため、もう長いこと旅を続けている。ここでしばらく休ませてもらえないか」。母親は村人達の手を借りて、一行をもてなします。夜更け、母は「我が子が乞食にならずに済むならば」と王様達の黄金に手を伸ばし、従者に見とがめられ、取り押さえられました。騒ぎで起きたアマールは、必死になって「盗んだのは僕だ」と母親をかばいます。その様子を見て感動した王様は言います。「ご婦人、その黄金はとっておきなさい。私達がお訪ねしようとしている幼子は、私達の黄金を必要とはなさいません。ただ愛の上に、その御国を建てようとなさる方だからです…彼は私達に新しい命をもたらし、私達の死を引き受け、彼の町に入る鍵は貧しい者の手にあるのです」。そう言って先を急ごうとする王達を、罪を悔い改めた母親は、呼び止めて言います。「お待ち下さい。どうぞこの黄金をお持ち帰り下さい。私達は生涯そのような王をお待ち申していたのです。もしも、こんなに貧しくなかったらば、私達もその幼子に贈り物をお捧げしたいのですが…。その時、アマールが「僕がこの松葉杖を捧げるよ」と言います。それは、これまで足の悪い彼を支えて来た、彼にとって何よりも大切なものでした。でも、それを捧げようとした時、彼は王達の方に向かって一歩踏み出し、そして松葉杖なしに歩けたことに気が付きます。「歩ける、母さん、僕、歩ける!」。王達は言います。「これこそ聖なる御子のしるし、私達は新しくお生まれになった王を褒め称えなくてはなりません」。そしてアマールは、3人の王様と一緒に幼子を拝する旅に出るのです。背中には幼子に捧げる松葉杖が背負われていました。

長く引用しましたが、アマールの姿は、神の招きに応答する信仰者の姿を象徴していると思うのです。アマールが、それまで握りしめていたものを、差し出そうとした時、つまり、幼子イエスを拝するという神の招きに応答しようとした時、彼は素晴らしい祝福を経験したのです。東方の博士達も、神の招きに応えた時、人生が変えられるような喜びと祝福を経験したのです。皆さんは、今、どのような招きを受けておられるでしょうか。何を変えるように示されているでしょうか。神様は、私達を良く知っておられ、私達の信仰生活を成長させるために、前に向かって招かれるのです。「この年までこれでやって来たから、今さら…」と思わないで下さい。私達の信仰生活は、死ぬ瞬間まで「聖化」を願い求める歩みです。私達が、神の招きを真剣に受け止め、その招きに応えようとする時、私達はきっと、豊かな信仰の祝福を、神を、経験するのではないのでしょうか。イエス様を拝するために、神の招きに応えて、2000kmを旅した博士達のことを心に刻みたいと願うことです。